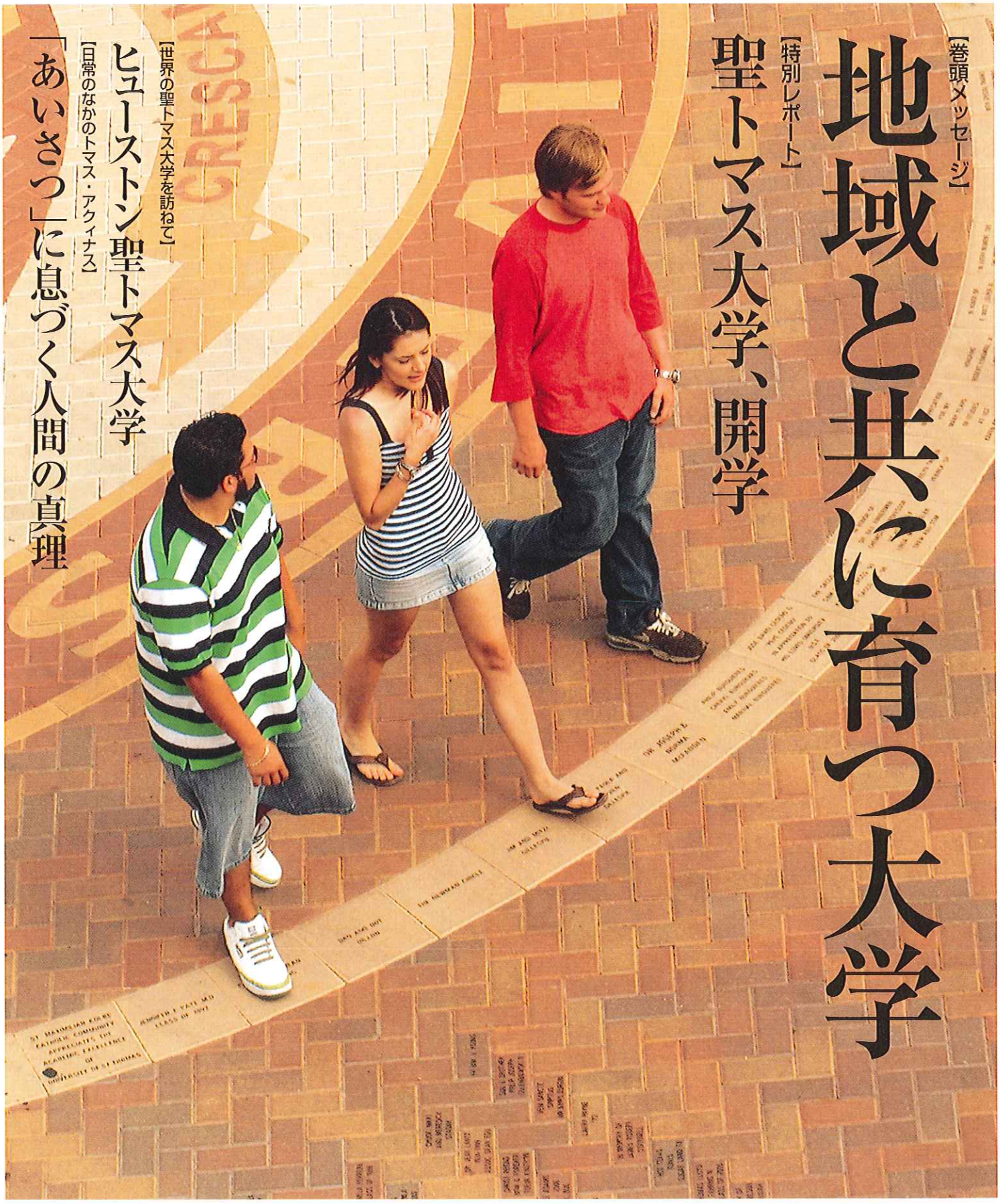
Thomas

聖トマス大学通信

vol.100
2008
March



【巻頭メッセージ】
地域と共に育つ大学

【特別レポート】
聖トマス大学、開学

【世界の聖トマス大学を訪ねて】
ヒューストン聖トマス大学

【日常のなかのトマス・アクィナス】
「あいさつ」に息づく人間の真理

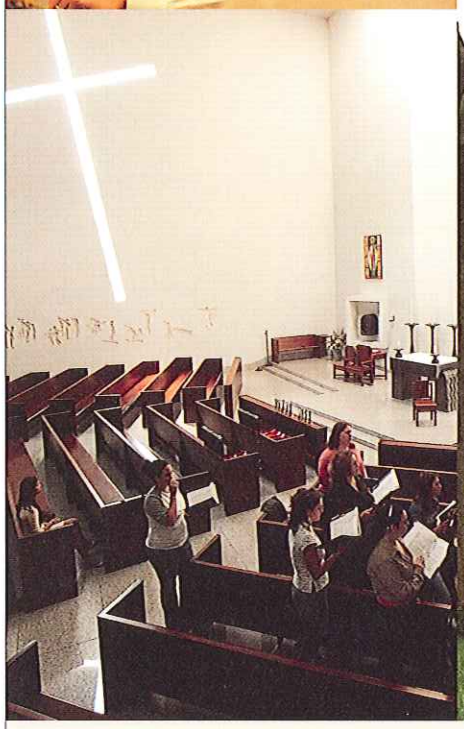
質の高い語学教育を象徴する国際色豊かなキャンパス

ヒューストン聖トマス大学

UNIVERSITY ST. THOMAS

Educating Leaders of Faith and Character

3800 MONTROSE BOULEVARD
HOUSTON, TEXAS 77006
713-525-3100
www.stthom.edu



ヒューストン聖トマス大学は、スペースシャトルで知られるアメリカ第4の大都市、テキサス州ヒューストン市にあります。1947年に学生57名、教師8名で創立されてから、「善性・規律・知識を学ぶ」をモットーとして、優れたカトリック系教育機関となるべく発展してきました。60年を経た現在は、教師陣約280名、学生数約3600名と規模は拡大し、各種施設も充実してきています。

学生本位の授業プログラムを推進し、地域や企業との協力関係により、実践的な教育指導に積極的に取り組んでいます。

アメリカ国内30以上の州から学生が集まり、海外からの留学生も多いので、キャンパスは国際色が非常に豊かです。また、ELSランゲージ・センターが併設されており、質の高い語学教育を提供するだけでなく、さまざまなイベントを実施して国際交流の促進を図っています。大学ではアカデミックアドバイザーや生活アドバイザーが留学生のきめ細やかなケアにあたっているので、安心して留学生活を楽しむことができます。

（写真提供：ヒューストン聖トマス大学）

Thomas
[トマス]
Mar. 2008 vol.100
英知通信「SAPIENTIA」は、今号より
聖トマス通信「Thomas」に誌名を改称しました。

企　　画：聖トマス大学入試広報課
制　　作：株式会社 教材研究所
デザイン：堀内デザインオフィス
撮　　影：聖トマス大学入試広報課
西村浩一・平垣内悠人
印刷製本：株式会社 スイッチ.ティフ

CONTENTS

●世界の聖トマス大学を訪ねて …… 2
ヒューストン聖トマス大学

●巻頭メッセージ …… 4
地域と共に育つ大学
小田武彦（聖トマス大学学長）

●「大学名称変更記念式典」特別レポート …… 8
聖トマス大学、開学

●シリーズ企画／日常のなかのトマス・アクィナス …… 12
「あいさつ」に息づく人間の真理
ボナツィ・アンドレア（聖トマス大学大学院教授）

●Topics & Information …… 14
本館と1号館の耐震工事・改装工事が完了
〈地域でつくる平和と共生〉フォーラム
聖トマス大学「新聖祭」開催
フィリピン文化体験パイロットプログラム
学生支援室の拡充

（付録）
法人会計決算の概要（平成18年度）
貸借対照表
法人理事・監事並びに評議員の交代及び副学長就任のお知らせ

言葉の贈り物 ①

ルルドで起こったこと

ピレネー山地の麓にあるフランスの小さな村ルルドで、ベルナデッタの前に聖母が御出現になって150年になります。ルルドは今や年間500万人以上が訪れる一大巡礼地になっており、記念の年である今年はさらに賑わうことでしょう。しかし、あのとき、聖母が最も無学で貧しい少女の前に現れたことを私たちは心に留めておくべきです。地球環境問題の解決が叫ばれる今、弱者が切り捨てられ、経済が支配するこの世界は、どこへ行こうとしているのでしょうか。

わたしはいにしえの日を思い出し、
あなたが行われたすべてのことを考え、
あなたのみ手のわざを思います。
わたしはあなたに向かって手を伸べ、
わが魂は、かわききった地のように
あなたを慕います。

『詩篇』第143篇

巻頭メッセージ

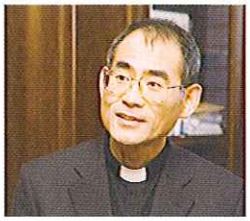
地域と共に育つ大学

小田武彦（聖トマス大学学長）

大学とは、社会に仕える人間を育てる場所。「地域との共生」を拡大し人、まち、大学を変えていく。

小田武彦（おだたけひこ）

1953年、奈良県生まれ。1981年、上智大学大学院神学研究科博士前期課程修了。1988年、教皇庁立グレゴリアン大学宣教学部博士課程修了（宣教学博士）。1990年、日本カトリック宣教研究所研究員、1995年から同研究所所長。2000年4月、英知大学に着任。2005年より同大学学長。2007年5月、名称変更により聖トマス大学学長に就任。



尼崎、そして若王寺という地域に生きる大学として どんな教育を展開し、地元の方々とどのような関わりを築いていくのか――本学の小田武彦学長が「地域との共生」にかける思いを語ります。

大学の使命は、人に仕える人間 社会に仕える人間を育成すること

大学とは何か。大学は専門学校でもなく、職業訓練所でもなく、研究所でもありません。大学は人を育てる教育機関、もっと言えば、総合的な知識を身につけ、さまざまな文化や思想をもった人と共に生きることができる「地球人」を育成する教育機関であると、私は考えています。

では、何のために総合的な知識を身につけるのか。それは、人に仕える人間、社会に仕える人間を育成するためであると考えます。それこそが大学の使命だと。ところが今や社会に仕える人間を育成するには、地域の方々の協力なしには教育ができないという時代に入っています。

いまから半世紀ほど前、１９５５年ごろには就業人口に占めるサラリーマンの割合は50％にも満たなかったのが、いまでは85％にも高まっています。そうした社会の変化が確実に子どもたちの教育に影響を与えています。

働く人の半数以上が自営業だった時代には、子どもたちは小学校あるいは中学校の行き帰りの途中で、多くの働く大人を見ながら育つことができました。働いている大人の間を走り抜けて遊ぶことができたのです。ところが、自営業の人たちが激減することによって、働く大人を町で見かけることが少なくなりました。子どもたちが「社会で働く」ということを肌で感じる機会が極端に減ってしまいました。

その結果のひとつが「ニート」と呼ばれる若者の誕生です。自分が何をしていいのかが分からないし、そのイメージもわかない。親から言われて、まわりからの圧力で、仕事についても自分がやりたいことだとは全然思えない。そして仕事を辞めてしまう。あるいは自分には無理だと思って家の中に閉じこもり、自分を責めるようになります。

仕方なくそうなってしまった可能性があるのです。世の中が変わってしまったせいで、子どものときからずっと家庭と学校とを行き来するだけで、途中で働く人を見ることなく、「世の中」と出会うことなく育ってしまったのかもしれません。そうだとしたら、いきなり社会に出て働けるわけがありません。ましてや人に仕えることも、社会に仕えることもできるはずがないのです。

だからこそ彼ら若者に対しては意識的に地域社会との接点を増やしていかねばなりません。さまざまな人と出会うなかで、それぞれの存在の違いに気づき、その違いを理解し、受け入れ、共に生きる道を探る教育が不可欠になってきているのです。

若者が「世の中」に出会える町をつくり 地域社会を、日本を変えていく

これからの大学生は、自分が将来活躍するであろう社会を、学生時代にしっかりと体験しておく必要があります。自分の目で社会を見て、自分で触れて理解する。そして社会のなかでさまざまな働きをしている、さまざまな考えをもった人たちと手を携え

「大学名称変更記念式典」
特別レポート

聖トマス大学、開学

2007・5・27（聖霊降臨の主日）

新しいエンブレムと建学の精神について熱く語る小田学長

2007年5月27日（日）、NHK大阪ホールにおいて、英知大学が聖トマス大学としてスタートする大学名称変更記念式典が挙行されました。会場を埋めた約1300名の本学関係者は、記念すべき一日を期待と祈りをこめて祝いました。

式典は賢明学院中学高等学校ハンドベル部による賛歌によってしめやかに始まりました。そして聖霊降臨の主日の福音朗読・祈願があり、池長潤理事長あいさつ、井戸敏三兵庫県知事とヨゼフ・ピタウ ローマ教皇庁教育省前局長によるご祝辞をいただいたあと、小田武彦学長によって式辞が述べられました。

「大学を維持発展させるということは、生半可なことではありません。何人もの教職員が不安と焦燥感で眠られぬ夜を重ねてまいりました。しかし、イエスの弟子たちが、復活された主から聖霊を受けて派遣された今日、この場に参加している教職員一同、そして学生たちも希望と喜びにあふれています。それは、今日ここに、多くの方々が集まり、復活された主とともに、これからの聖トマス大学を見守り、ご支援くださり、導いてくださるということが、実感できるからです。

教会の誕生日である聖霊降臨の主日に、新たな一歩を踏み出す聖トマス大学は、キリストの弟子たちと同じ心強さを感じています。聖トマス大学の建学の精神を、具体的な行動によって全世界に伝える勇気をいただきました。

（10ページに続く）

北海道から沖縄まで、そして海外からも、1300人を超える同窓生や関係者が参集した

参加者を出迎える本学関係者

受付風景

【第1部】

賛歌　賢明学院中学高等学校　ハンドベル部

「GRAZIOSO」

「A JOYOUS CARILLON」

福音朗読　『ヨハネによる福音書』20章19～23

祈願

ご挨拶　理事長　池長　潤（カトリック大阪大司教区大司教）

兵庫県知事　井戸敏三

ローマ教皇庁教育省前局長　ヨゼフ・ピタウ

聖トマス大学学長　小田武彦

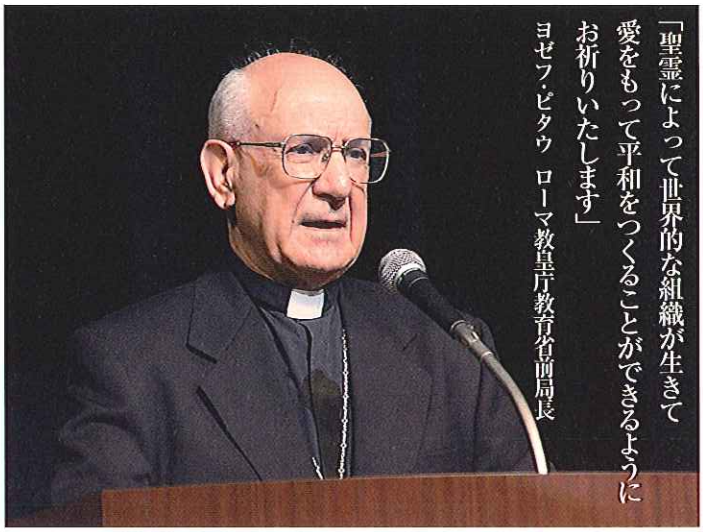
【第2部】

「歌談の会」小椋　佳

ハンドベルによる賛歌は厳かな中にも華やいだ雰囲気を演出した

「グローバル化が進むなか
IC-USTAへの参加によって
真の国際的な大学としてスタートします」
池長潤　理事長

「世界化の　いかなる道にも
とまどわず
まごころつらぬき　すすめ新大」
井戸敏三　兵庫県知事



「聖霊によって世界的な組織が生きて
愛をもって平和をつくることができるように
お祈りいたします」
ヨゼフ・ピタウ　ローマ教皇庁教育省前局長

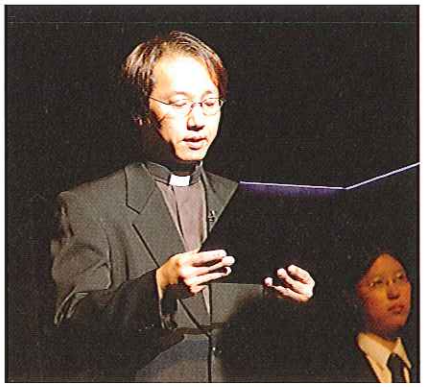
「聖トマス大学の建学の精神を
具体的な行動によって
全世界に伝える勇気をいただきました」
小田武彦　学長

英知大学という輝かしい大学名を変更することについては、本当に悩みました。しかし、創立者・故田口芳五郎枢機卿の言葉が、私を勇気づけました。『英知大学は、研究や教育活動の原理がキリスト教を土台とした創造的知性の最高学府である』という言葉です。創立者や先達の熱き思いを引き継いでいくためには、キリスト教を土台としたクリエイティブな知性を持って、現代世界に必要なことを積極的に実践していかねばなりません。時代を先取りし、変革していってこそ、建学の精神を体現できる大学であり続けることができるのでしょう。

聖トマス大学では、人と共に生きることを学び、人と共に生きるために知識を身につけます。完璧な人、偉い人を育てるのではありません。いのちを粗末にしない人、肌の色が違っても、使う言葉が違っても、生まれ育った環境や文化が違っても、共に生きる道を探し、その道をつくり、平和な世界を産み出す地球人を育てます。

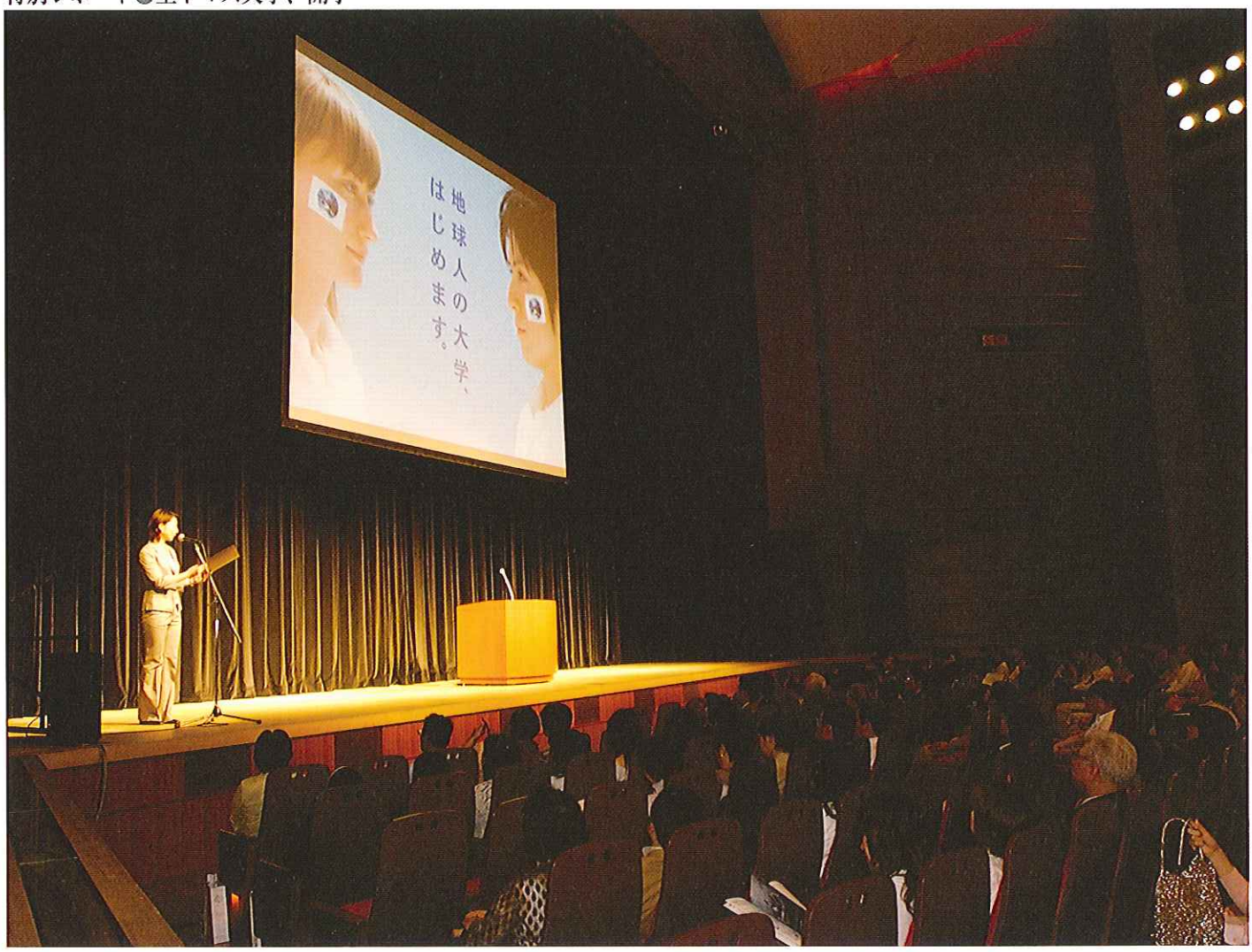
世界の人に必要とされる大学として羽ばたこうとしている聖トマス大学を、これからも温かく見守り、励まし、ご支援くださることを心からお願いして、学長式辞とさせていただきます」。

世界5大陸にキャンパスを広げた聖トマス大学が誕生しました。卒業生、在学生、そして保護者の方々とともに、本学関係者の総力で、聖トマス大学が日本の教育界をリードする大学となるよう、誓いを新たにした一日でした。



祈願（松村繁彦宗教主事）

全能、永遠の神よ、あなたは御子イエス・キリストによって聖霊を約束し、聖霊は豊かな恵みを授けてくださいます。今日、大学名称変更を迎えて祈り集う私たちを顧みてください。聖霊の力と恵みによって私たちを導き、すべての闇の力から解放し、あなたのみ旨を求め、その生き方を照らし清めてください。永遠の真理を求めて祈る私たちが、すべての人々と共に、あなたをたたえることができますように。私たちの主イエス・キリストによって。アーメン。



5大陸に広がる、地球人の大学が始まります！

St.Thomas Blue

ユニバーシティマークで使用する「St.Thomas Blue」は、"海、空、宇宙"といった地球規模の空間の広がりを連想させ、また"知性、清潔、平和"といった良質の価値をイメージさせる色としての力を持っています。
地球をフィールドとし、世界との共生をめざす最高学府という本校のアイデンティティを象徴するマークカラーとして設定しました。

St.Thomas

St. Thomas University

St.Thomas Gray

「St.Thomas Blue」との配色パターンにおいて"理知的、崇高、洗練"というイメージを醸成させる「グレー」が本校の精神、スタンスにふさわしいと考え、気品ある印象を与えるライト系の「St.Thomas Gray」を採用しました。

St. Thomas University
SAPIENTIA ET FORTITUDO

学章について

エンブレム（大学章）は、建学の精神と、これからの聖トマス大学の姿勢を表現したものです。
地球規模で活躍する聖トマス大学にふさわしく、生命の原点をイメージする宇宙・海・空をトマス・ブルーで表現し、新たな旅立ちを象徴する船を左肩に置きました。船に乗り合わせた者すべて、互いを受け入れ、心を一つにして協力していかねば荒波を乗り越えていくことはできません。「あらゆるいのちを大切にし、共に生きる」「共生」の精神を実践していくシンボルです。
右肩にある「本とペン」は、学問の最高学府としてのイメージと、聖トマス・アクィナスが学問によって真理を探究したイメージとを融合したものです。
中心には、キリスト教の愛の象徴である十字架を位置し、キリストに倣って、仕えられるためではなく、人々に仕えるために世界へと旅立つ本学の学生の姿を表現しています。
そして、それらの象徴を礎として支えてくれているのが、創立以来、脈々と卒業生の心に引き継がれ、生き続けている SAPIENTIA ET FORTITUDO『英知と勇気』です。

シリーズ企画●日常のなかのトマス・アクィナス

「あいさつ」に息づく人間の真理

ボナツィ・アンドレア（聖トマス大学大学院教授）

だれでも知っている〝Thank you〟〝Congratulations〟〝Forgive me〟などの形式的な「あいさつ言葉」には、実は人間の深い真理がこめられています。トマス・アクィナスを導き手として語源を探究してみると、毎日何気なく使っている言葉の背景に、心に響く素敵なメッセージが現れてきます。

"Thank you"「感謝」の三つの側面

人が感じる感謝の気持ち、報恩の念は複雑で、私たちは日常、この感情を断片的にしか言葉にしていません。トマス・アクィナスは「感謝の気持ちは複数の側面を含んでいる。第1の側面は、いただいた恩の承認、第2は相手に感謝を捧げ、第3の側面は報いたい気持ちを示している」と述べています。

たとえばフランス語の"reconnaisance"は、「承認」を意味し、感謝の類義語です。英語では"Thank"ですが、『Oxford English Dictionary』によると、"Thank"は"Think"に由来しており、第一義的な意味は「考える」です。同じくドイツ語の"Danken"も"Denken(考える)"からきています。

要するに感謝の気持ちとは、受けた恩のことを「考える」ことなのです。なるほど、感謝の念を持っている人は、恩人の心の広さを熟考(consider)するものです。感謝の気持ちの欠如を英語で"lack of consideration"というのも理解できます。

トマスは、「肯定の最小段階の否定は、否定の最大段階である」として、承認の欠如(恩を認めないこと)は最大の忘恩であると指摘しています。病気を認めない人が治療から一番遠い人であるというのと同じです。

"My dear"は「価格が高い」と同義

トマスは「愛」に関するさまざまな同義語、類義語の興味深い分析を行っています。たとえば、聖霊は御父と御子の"amor"や"caritas"または"dilectio"であるというところをとりあげてみましょう。"Amor"は愛されるものの単純な「愛情(affectio)」を示すのに対し、"dilectio"は語源が示すように「選び」を前提とし、したがって合理的な働きを含んでいます。"Caritas"は"dilectio"の熱情を強調しています。つまり、愛される者は、計算できないほど価値があるということ。「物価や価格」が「高い」(dear)というのと同じような意味においてです。したがって"my dear friend"(親愛なる友人)と"beans are dear"(豆の値段が高い)で同じ単語を使うのは偶然ではないのです。

また"Caritas"(charity)は、金銭や価格を連想させる言葉でしたが、物事を商人のように現実主義的に考えていた中世人にとっては、この言葉を神の愛と隣人愛を示すために使っても下品でありませんでした。トマスもはっきりとそのように述べています。ですから私たちは"my dear friend"、"my dear Tom"という場合、価格、評価、評価額にまつわる隠喩を使っているのです。そこから、"appreciate"(価格をつける)という言葉も由来します。福音書には天の国は、畑に隠された宝や高貴な真珠を探す商人に譬えられますが、その高価なものを得るためには代価を支払わなければならず、その場合も"caritas"という言葉が使われます。

聖トマス・アクィナス(1225年頃〜1274年)
大学名の由来である聖トマス・アクィナスは、中世ヨーロッパを代表する神学者・哲学者で、古代ユダヤを源流とするキリスト教の教えと、古代ギリシャの哲学者アリストテレスの思想を統合し、キリスト教を初めて総合的に体系化しました。何よりも真実を求め、異なる考えや立場の人々とも積極的に対話しながら人間の幸福を追究し続けました。

"Congratulations"は喜びの共有を示す

結婚や卒業式など、おめでたいときによく使う言葉として"Congratulations"、"Enhorabuena"(スペイン語)、"Parabens"(ポルトガル語)、"Auguri"(イタリア語)があります。トマスと同様に、まずこれらの語源からみていくことにしましょう。

"Enhorabuena"は文字通り「良い時に」を意味します。つまり、一定の軌道(卒業するまでの歩み)が今や終着点に到着し、長い間待ちに待った収穫を手にするときが来たことを表しています。達成の時は最高の時であるということ。「悪い時」もあれば、「良い時」もあるなかで、中世の人々にとっては、「事の終わりは始めにまさる」ものだったのです。

"Congratulations"は"cum"+"gratus"からきていて、ありがたいことや喜びを共にし、分かち合うことを示しています。喜びの共有を示すラテン語の動詞"gratulor"または"congratulor"は"deponent form"(異相動詞)であり、受動でも能動でもない動作を表します。つまり、主体の動作は主体自身に帰っており、"Congratulations"の場合のように、相手に向かって表す喜びは、本人に帰ってくるのです。

"Pardon"と"Forgive me"「許し」と「与える」の最上級のつながり

現代の西欧諸言語に使われる"perdoar"(ポルトガル語)、"perdonar"(スペイン語)、"perdonare"(イタリア語)、"pardonner"(フランス語)の語源の哲学的理由付けは、トマスにさかのぼると思われます。『Oxford English Dictionary』は、接頭辞"per"は形容詞や副詞の最上級を表すために使われると述べています。それに従えば、"perdonar"は"donare"(与える)の最上級となります。同じような現象は英語の"forgive"とドイツ語の"vorgeben"にも見られます。

次のくだりは、トマスがよく引用する典礼文にあるものです。

:"Deus qui omnipotentiam tuam parcendo maxime manifestas"(許すことにおいて、その全能性を最高に示してくださる神よ)

トマスは、神において「許す権能」は天地創造の権能を上回ると主張しています。さらに、トマスの時代に使われていたラテン語聖書『Vulgata』の註解でトマスは、"Donate, id est parcite"(与えなさい、すなわち許しなさい)、そして"Donantes, id est parcentes"(与える、すなわち許すこと)と解釈しています。与える行為の最高のあり方は許すこと。トマスは「許す」と「与える」の最上級のつながりを思索していたのです。

ボナツィ・アンドレア
Bonazzi Andrea

1955年イタリア生まれ。聖ザベリオ宣教会士。Urbaniana大学神学部卒業。大阪市立大学文学修士、文学博士(哲学)。英知大学文学部教授を経て、現在は聖トマス大学大学院教授、キリスト教文化研究所所長、トマス・アクィナス研究所所長。

Topics & Information

本館と1号館の耐震工事・改装工事が完了。

1号館5階の新教室祝福式(2007年10月30日)

植え込みがなくなり、見通しがよくなりました

耐震工事が完了した1号館

2007年春より進められていた本館と1号館の耐震工事および改装工事が完了しました。筋交いなどで建物全体を包み込むように耐震補強が施された1号館は、建物外壁もシックなレンガ色に塗り直され、落ち着いたイメージの教室・事務棟に生まれ変わりました。またキャンパスと外部を遮断していた本館横の植え込みも取り除かれ、オープンな印象になりました。

建物内部の改装工事も併行して進められ、まず本館3階に、幼児・児童の英語教育に使用される「キッズ・イングリッシュ・ルーム」が完成。また1号館では、1階〜4階の床改装の他、5階全フロアを使って、2008年4月からスタートする「人間発達科学科」の15の新教室が竣工。昨年10月30日には祝福式が厳かに執り行われました。

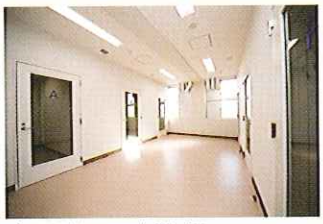
このフロアには、指導実習や模擬授業が実施できる多様な実習室が完備されており、今後は本学の教育研究活動の中核施設として稼働していくことになります。

新教室を祝福する池長理事長(中央)、小田学長(左)、松本学長補佐(右)

理科室

図工室

広々とした保育実習室


ピアノ個人レッスン室は全6室

〈地域でつくる平和と共生〉フォーラム、2007年度を振り返って。

聖トマス大学では、地域住民の方々が気軽に参加できる学びと交流の場づくりをめざして、連続フォーラム(公開討論会)を開催しています。2007年度は、本学図書館が中心となり、地元の特別養護老人ホーム園田苑、NPO法人愛逢(あいあい)と共同で企画を進めながら、「〈地域でつくる平和と共生〉フォーラム」を連続で開催しました。

このフォーラムでは、尼崎で暮らす人、仕事をする人、ゆかりのある人々のなかから、さまざまな経験をもったお年寄り、福祉や国際交流などの現場で仕事をされている方々をお招きして、「平和と共生」に関連した共通テーマを、みんなで一緒に考え、学び合います。普段はあまり聞くことのない、隣人の生きざまや、悩み、喜びなどに耳を傾けるうちに、地域の連帯感が自然と深まっていきました。

2007年度は、5月下旬の第1回フォーラムに始まり、右記の7回のフォーラムが開催されました。毎回、多数の市民に参加いただき、フォーラムの内容が新聞やテレビに取り上げられるなど、静かな盛り上がりを見せました。

これまでのフォーラムの詳細は聖トマス大学図書館ホームページに詳しく紹介されていますので、ぜひご覧ください(http://www.st.thomas.ac.jp/library/)。また今後の予定など、フォーラムについてのお問い合わせは図書館まで(TEL06-6491-7237)。

第1回は尼崎市にお住まいの比嘉(ひが)光子さんから沖縄の学徒看護隊の戦争体験をお聞きしました

これまでに開催されたフォーラム

●第1回(5月24日)
「沖縄戦を生きのびて:
白梅学徒隊のひとりとして」

●第2回(6月21日)
「ハンセン病と人間回復:
病や老いと共に生きる社会」

●第3回(7月26日)
「阪神教育事件と多文化共生教育の未来」

●第4回(10月25日)
「フィリピン元『従軍慰安婦』のおばあちゃんと私たち」

●第5回(11月22日)
「少年犯罪に向き合う」

●第6回(12月13日)
「障害者が地域で生きること:
みんなの労働文化センターの25年」

●第7回(2008年1月24日)
「共生の町づくり尼崎:
ふつうの市民が市長さんになるって?」

フィリピンのおばあちゃんたちから過酷な戦争体験を聞いた第4回フォーラム

第7回は白井文尼崎市長をお招きしました

聖トマス大学「新聖祭」、にぎやかに開催。

百合学院小学校の児童たちによるパフォーマンス

地元の子どもたちもたくさん来てくれました

地元のサッカークラブ「フィオーレ」のフットサル試合も行われました

ファンタジックなボトルアートも登場

聖トマス大学祭「新星祭」が、昨年11月2日(金)・3日(土)の2日間にわたり、大学キャンパスでにぎやかに開催されました。

今回の大学祭は通算44回目となりますが、「新聖祭」という名前が示すとおり、大学名称が聖トマス大学に変更されて初めての大学祭。今回、実行委員長を務めた平林佳澄さん(旧英知大学英文学科4回生)はネーミングの由来を次のように語っています。

「この大学が大きく生まれ変わっていくなかで、私たち実行委員は『大学祭も生まれ変わらなければ！』と考えて、名称を"聖トマス祭"とはせずに、『毎年の繰り返しではなく、いつも新しい何かを求めていく』という意味で"新"の字を入れて"新聖祭"としました」

このコンセプトのとおり、2日間のプログラムは、尼崎市長を交えたフォーラム、音楽ライブ、クラブ・サークルの発表、アート展示、フットサル、同窓会、カラオケ大会、天体観測、フリーマーケットetc.と、それぞれに工夫を凝らしたイベントが盛りだくさん。「新聖祭」にふさわしい、元気いっぱいのフェスティバルとなりました。学生、教職員、同窓生はもちろんのこと、今年は地域の方々の参加も多く、新たなスタートにふさわしい大学祭となりました。

留学生の模擬店も大人気

スペースも広がり、内容も充実。学生支援室の今後の活動にご期待ください。

学習支援や進路相談はもちろんのこと、生活支援から、時には精神面のバックアップまで、本学の「名物」として今や日々のキャンパスライフには欠かせない存在となっている学生支援室。用事がなくても、とりあえず毎朝顔を出しますという学友も増えて、最近、支援室もちょっと手狭になってきました。そこで、この春からスペースを今の1.5倍に拡張することになりました。

さらに利用しやすくなった学生支援室

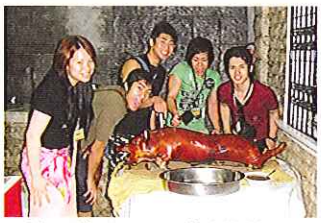
談笑したり、くつろいだり……憩いのスペースも広がりますが、4月から特に力を入れていくのが「学習支援」。学生支援室では、パソコンを使ったネット検索やレポートづくりをする学生も多く、試験期間などは利用が集中します。そこで、こうした作業に使えるスペースを拡充するとともに、支援室スタッフも、今まで以上にきめ細かなアドバイスを行い、学習活動をしっかりと支援していきます。

またこの4月1日から「STUボランティアセンター」がオープンします。専任のボランティアコーディネーターが常駐し、いつでも学生のニーズに対応していきます。ボランティア活動に興味関心のある学生は気軽に声をかけてください。

海外のアクィナス大学と初の交流。「フィリピン文化体験パイロットプログラム」で異文化を体感。

ご存じのとおり、本学は2007年4月、聖トマス・アクィナス大学国際協議会(IC-USTA)に加盟し、大学名を「聖トマス大学」に改称しました。現在この協議会に加盟している大学は世界に約40大学ありますが、そのなかのひとつ、フィリピン中部レガスピ市にあるアクィナス大学の協力により、「フィリピン文化体験パイロットプログラム」が去る2月に実施されました。

本学の国際言語教育センター(SILEC)が企画運営にあたったこのプログラムは、語学研修が第一の目的ではなく、フィリピンの日常生活を見て、聞いて、触れて、味わって、自分自身でフィリピンという国の匂いを感じとることが最大の目的。



五感をフル活用してフィリピンを体感中！

多文化共生学科のスティーブン・ライアン教授引率のもと、5人の学生が参加した研修は、2月17日から27日までの11日間、アクィナス大学訪問やホームステイ、また近隣の農村を訪ねたりとフィリピン文化体験を重ねました。

現地では集中豪雨に見舞われるというハプニングもありましたが、学生たちは目で見て肌で感じたフィリピンに深く感じ入った様子。同行したライアン先生も、学生たちと現地の人々との交流を見て、ああ来てよかったと思わず涙ぐむ場面もあったとのこと。初めてのフィリピン文化体験プログラムは、今後の多文化交流の指針となる貴重な成果を残して、無事日程を終了しました。

Thomas
聖トマス大学通信「トマス」Vol.100　2008年3月発行
発行：聖トマス大学 入試広報課　〒661-8530 兵庫県尼崎市若王寺2丁目18番1号　Tel：06-6491-5100　Fax：06-6491-7120　URL http://www.st.thomas.ac.jp

留学生からのメッセージ①

高くそびえ立つ言葉の壁も乗り越えた楽しくもハードな「勉強」の日々。

語学学校の仲間たちとアイダホ州のサーモンリバーでラフティングに。前列右から二人目が松本さん。

ワシントン州立大学(アメリカ)で語学留学

松本真季さん
Matsumoto Maki
(旧英知大学　文学部英語英文学科3回生)

アメリカの姉妹校、ワシントン州立大学に5月末から約7カ月間留学し、たくさんのものを得ることができました。

まず、行ってすぐに英語でつまずきました。中学1年生から8年間も英語を勉強したにもかかわらず、ほとんど聞き取りすらできなくて、語学学校の授業も友達との会話も理解できませんでした。それに加えて初めての一人暮らし。寮に住んでいたので、炊事・洗濯・掃除など、すべての家事を勉強と両立させなければなりませんでした。

しかし、このようなハードな生活にもいつの間にか慣れ、高くそびえ立った言葉の壁も国境を越えた友情やスポーツ、独立記念日、ハロウィン、学部の授業などを通して徐々になくなっていき、毎日が楽しくて仕方ありませんでした。それでもやはり学校の授業は大変でした。今思い返してもこのときの私は人生で一番勉強したと胸を張って言えます。

最後にアメリカだけでなく、改めて日本のよさに気づきました。日本にいたときは当たり前だった周りの人たちの存在の大切さが身にしみました。私はこの貴重な体験のおかげで成長することができました。

まつもとまき。大阪市立南高等学校出身。2007年5月より12月まで、シアトルの東方ブルマンにあるワシントン州立大学へ語学留学。将来は航空会社で内外のお客様に接する仕事をするのが夢。帰国後もTOEIC高得点をめざし、猛勉強の日々が続く。

STUからひとこと

「英語できないから留学なんてムリ」という言葉をよく聞きます。でも生まれたときから他国の言葉を話せる人はいません。私たちが日本語を話せるのは、何回も何回も聞いて、一日中聞いて、発音して覚えたからです。だから外国語を怖がらないで、あきらめないで、留学という夢をつかんでください。聖トマス大学には多文化交流センターがあり、ここでは全世界に広がるIC-USTA加盟大学や、提携校への留学に関するアドバイスをしています。一度訪ねてみてください。